

に教育的観点から見直して教育課程に取り込むという方針のもとに
国定教科書『毛筆画手本』『鉛筆画手本』（明治三十七年）、『毛筆
画帖』『鉛筆画帖』（同四十二年）、『新定画帖』（同四十三年）等が編
纂され、「教育的図画の時代」が到来するのである。

なお、委員会の結論のなかには東京美術学校との関係上、特に注
目すべき条項がある。それは教員養成法の第一に掲げられている
「特別養成所設置ノ必要」である。東京美術学校では既に明治三十
二年以来、年報に図画講習科を拡張して教員養成法を確立する案を
示していたが、三十四年度年報では「図画教員養成科」という名称
で、次いで正木校長就任後の三十五年度年報以降は「図画師範科」
という名称で教員養成を目的とする科の増設を文部省に要請し、明
治四十年には図画師範科が設置される。「特別養成所設置ノ必要」
はこうした一連の動きと不可分のものであったといえよう。

⑩ 白浜徴の起用

図画教育改革を企図する正木直彦がその責任者として選んだのは
白浜徴であった。正木は図画取調委員会に先き立って、明治三十四
年十一月二十六日に高等師範学校助教授であった白浜を東京美術学
校の教授として迎え、教員養成課程の指導を委ねた。

白浜は五島藩士白浜久徴（文久三年家老職。維新後京都、次いで東京
で新政府官吏をつとめた。）の子として慶応元年に福江に生まれ、長崎
外国語学校、東京大学予備門（正木直彦と同期）を経て明治二十二年
九月東京美術学校に入学。同二十七年七月同校絵画科を卒業し、翌
年高等師範学校の助教授となった。同校の図画教師は鉛筆画教育の

泰斗小山正太郎辞職後岡吉寿（号不崩。東京美術学校中退）が毛筆画を
教え、その後任となったのが白浜であったが、彼の教育法は東京美
術学校の絵画（日本画）教程、つまり、フェノロサ、岡倉寛三らの考
案に成る、臨画・写生・新案の三科目に絵画の三要素である線・濃
淡・色彩の練習を組み合わせた教程を採り入れたものであったら
しい。彼は同校在職中から尋常師範学校・尋常中学校・高等女学校教
員検定委員をつとめ、『日本臨画帖』八冊（三十年）、『日本臨画帖
教授法』（同年）、『高等小学日本臨画帖』八冊（三十一年）、『中等画
手本（本多天城と共著。三十三年）、『女子高等画帖』（川端玉章と共著。
同年）などの著述があった。才気煥発、特に英語は抜群であったと
いわれる。正木は白浜の抜擢について次のように述べている。

處が明治三十四年に、私が當校「東京美術学校」に就職するやう
になることになり、私も圖畫教育に多少興味を持つて居りました
ので、白濱先生に高等師範に於いて行つて居たとは違つた、もつ
と別な方法はないものかと言つて、高等師範の方から來て教員養
成にあたつて貰ふことになりました。當時中等教員の圖畫教育を
奈何にすべきかといふ事を考へ、文部當局にも進言して、此の方
面に同じ考えを持つ者を糾合して、文部省に圖畫教育取調委員會
といふものの設置を見るに到りました。此處に於いて國定教科書
の編纂ともなつたのであります。それから漸く圖畫教育を研究し
やうとする氣運が起り、白濱先生も亦斯道の研究に熱心だつたの
であります。

〔挨拶〕 『白濱先生還曆記念』大正十五年、編集代表今井伴次郎〕

この「高等師範に於いて行つて居たとは違つた、もつと別な方法」とは「普通教育に於ける図画取調委員会」の項で触れた新しい教員養成法をさすと思われる。

次に、教授就任早々の白浜の講義について言うと、明治三十年代の東京美術学校では図画教員志望者（日本画科、西洋画科、図案科の生徒に限る。）は最終学年で「教育学」を履修することが義務づけられており、白浜は教授就任とともに蔵原惟郭に替つてこの科目を担当したが、その講義については現在西方春叢の筆記ノート（明治三十五～三十六年筆記）が残っている。その内容項目を掲げればおよそ次のとおりである。

序論 講義方針、日本教育史大要、西洋教育史大要、学校教育の現状

教育学大要

図画教育

普通教育図画の歴史 ペスタロッチ、ヨハン・ラムザウエル、ペートル・シュミット、フリードリッヒ・オット、ジュフイ、フランツ、ラインの方法

諸説に共通の理念および日本の現状

図画を普通教育に加える理由

図画教授の順序 臨画、写生画、幾何画（幾何画法、投影画法、陰影画法、透視画法）、考案画（図案、作画、作画準備としての記憶画）

教授の実際 教授科目の連絡、教材の選択、講話、教授用備品

および設備

小学校、中学校、高等女学校等の図画に関する諸規定

教材および教授法 毛筆画、鉛筆画、水彩画、用器画
教師の心得

図画教育参考書

白浜は教授としてだけではなく、既述の図画取調委員会や翌三十年の小学校図画国定教科書編纂委員会、文部省図画教授法講習会、図画教育会などを舞台として活躍した。三十七年発行の国定教科書『毛筆画手本』の挿画は白浜の執筆である（『鉛筆画手本』は小正太郎）。その間、各地の学校の実情調査を行い、また、西欧の図画教育理論の研究にもつとめ、留学後図画師範科初代教授となる。

① 下村観山の英国留学

明治三十五年八月一日、教授下村観山は二ヶ年の英国留学を命ぜられ、日本画家として初めて国費留学の途に着くこととなった。特に日本美術院の有力メンバーである観山が選ばれたのは正木校長の政治的配慮によるものと思われる。この決定に対しては日本画法を破壊するとか国費濫用だとかの議論が起こり、新聞にもそれが取り上げられているが、『都新聞』（同年九月二十三、二十四、二十六日）は好意的に扱って観山の談話筆記を掲載している。これは観山の考えを知る数少ない資料の一つであるだけでなく、特に同じ美術院で横山山観や菱田春草が朦朧体の悪評を蒙りながら日本画革新の運動を続けていた時期の観山の考えを知る材料となるのでここに掲載する。

○下村観山氏の覚悟